

アンコール現地レポート 13

カンボジア天候、一喜一憂 - 10月集中豪雨 -

10月8日（日本での一時帰国を終えて）

10月8日、1ヶ月ぶりにカンボジアに戻った。日本滞在中、気がかりだったのは、この8月から始まった豪雨によるカンボジア国内での水害であった。カンボジアでは雨期に降る雨により、地域によって毎年、冠水^{かんすい}する地域も数多く見られる。しかし、今年は例年になく降水量が多く、水位が非常に高い。その結果、数多くの家屋が浸水し、死者も報告されている他、水害による食糧難が深刻な事態となっている。



プノンペンを飛び立って直ぐの空よりの風景。雨期末期の現在は、一面、水に覆われているが、中央に筋状に走る2本の線が乾期の際の河岸。

プノンペンからシェムリアップに戻る途中の上空からの眺めも、一面の冠水^{かんすい}風景だった。カンボジアの首都、プノンペンは、北から下るメコン川と北東から下るトンレサップ川の合流点に位置しているが、この両河川に挟まれた地域は完全に水に浸かった状態であった。

シェムリアップに向かう飛行機は、このトンレサップ川に平行の航路を採るが、蛇行を繰り返すトンレサップ川の輪郭が微かに確認出来るほど水は広がっていた。道路に沿って建っているはずの家屋が、水に漂う浮き草のように見えた。

「トンレサップ湖の湖水面積は、雨期では乾期の三倍となる」という話をしばし聞くが、それを裏付ける状況が眼下に広がっていた。本来ならばトンレサップ湖の水を排水する役割を持つトンレサップ川がメコン川の氾濫により閉塞状態となり、トンレサップ湖の水位を上昇させ、周辺地域を冠水させる。上空からは乾期の時の湖岸面をうっすらと確認でき

るが、その乾期の湖岸面を遙かに超えて雨期の湖岸面が広がる光景を見て、改めて水量の差をまじまじと感じた。

10月9日（シェムリアップへ戻る）

10月9日の午後5時、シェムリアップに到着。空港で私を出迎える人々を見つけ、現在のシェムリアップの状況を聞く。ところが私の^{きく}危惧とは裏腹に、ここ1週間ほど、まともな雨もなく落ち着いているという。確かに街中を流れるシェムリアップ川の水位もいつもの雨期よりも低いぐらいだった。

私はやや拍子抜けし、その素直な安堵感を日本への人々に書いた。「（中略）空より眺めるカンボジアの景色も至る所で水に浸った個所が見られ、水害による被害を危惧していたのですが、ここシェムリアップは目立った被害も無く、平常通りの雨期の景色でした。」

（10月9日の夜半に送ったメールの一文）

10月11日（豪雨）

ところが、である。翌11日の明け方より、事態は一変した。いつもなら1時間か2時間で止む雨が、その朝より2日2晩、降り続いた。河川の水位はみるみる上昇し、低地に水が流れ込み、至る所が冠水した。床上浸水を起こしている家屋も多い。カンボジアの道路は非常に傷みが激しく、至る所、穴ぼこだらけだが、冠水した道では、何処にその穴があるか分からない状況となった。

日本の水害でも、あたり一面が冠水した時には、道路側面の側溝に足を取られたり、マンホールの蓋が水圧で押し上げられて、穴が開いてしまっている所に転落したりして、命を落とすことが最も危険だと聞いた。まして、ここはカンボジア。あたり一面水浸しの状況の道を、夜の暗い時間帯に通る時の何とも心細いことか。

ちなみにカンボジアでの水害による死者は、日本のように濁流に呑み込まれるというの
は少なく、ひたひたと迫る水位上昇により、あたり一面が冠水し、避難を決めた時には、
近傍には高所がなく、そこに向かう途中で深みにはまったりして溺れ死ぬというケースが
ほとんどだという。従って、犠牲者は子供、老人が多いということだった。

10月13日(小康止)



シェムリアップ川の氾濫。トンレサップ湖へ向かう南への道は、タ・プロムホテルの南側直ぐの所で氾濫。写真の左側が川で、右が道路。

2日間降り続いた雨も、ようやく13日の朝になり一段落した。街へ繰り出すと、いたるところが水浸しである。トンレサップ湖へ向かう南への道は、タ・プロムホテルの南側直ぐの所で冠水状態となっていた。

ここはちょうどシェムリアップ川が直角に曲がる位置で、川から溢れ出た水がドクドクと家屋の建つ地域へと流れ込んでいる。毎年、町の南にあるワニ園周辺は河岸が低いため、多少の雨でも氾濫するのだが、今年は落ち着いていられるレベルではない。ワニ園のワニが逃げ出したらどうするのだという恐れが脳裏をよぎる。



シェムリアップ川の氾濫。アルーン・レストランの前。対岸であるグランドホテルの野外劇場周辺も水浸しであった。

街中でもグランドホテル横の野外劇場のあたりが川の氾濫で冠水していた他、川沿いのバイオンホテルからダイヤモンドホテルまでの間も、あと10cm程で川が氾濫しそう
で、道路に設けられた排水溝から川の水が逆流し、道路が水浸しになっていた。

それでも13日の日中は雨がなく、天気は一時、落ち着いた。しかし、夜になり、再び激しい雨に見舞われた。もう、

河川の水位が限界に達していることは明確で、これ以上、雨が降ればより激しい河川の氾濫、冠水区域の拡大は逃れ得ないのが実情だった。

10月14日（豪雨の終わり）

予想通り、河川の水位が10cm以上上昇し、大量の水が河岸を越えて街に流れ込んだ。ただ、ここシムリアップの場合、河川といっても日本のように高い堤防が築かれているわけではなく、堤防の決壊により一気に大量の水が流れ込むという現象は見られない。その点では、日本の河川が決壊した時と比べると、被害は緩やかかもしれない。



また河川の水位上昇により、両岸の樹木も倒れた。樹齢100年を超えるような大木が、根元から根こそぎ倒れ、川をふさぐケースも見られた。王宮の前にかかる橋の^{たもと}袂に生えていた大木が倒壊し、国道6号線を完全に寸断した。

王宮前にかかる橋の袂に生えていた大木が倒壊、国道6号線を完全に塞ぐ。

朝からこの大木の取り払い作業が開始されたが、何せ大木なため、チェーンソーで切り刻んでも相当な時間を要する。シムリアップの中心部を塞ぐ形となったため、あたりは車、バイク、人ごみでごった返す。水難を受けている人が多いにもかかわらず、この大木の除去作業という非日常的な出来事を結構、興味深く見物している人も少なくなかった。

こうした光景を見て、私がモロッコにいた5、6年前、モロッコ南部の州都ワルザザートを流れる河川が大雨で氾濫寸前となった時のことを思い出した。私はちょうどその時、モロッコ南部のカスバ（モロッコ南部の伝統的な土で出来た町並み）を見に、そこに永住していた日本人の家に泊まっていた。彼の住んでいたところはワルザザートの隣の小さな町で、ワルザザートに行くには幅100m以上ある川を越えて行かなければならない。その

川が前日の大雨で氾濫寸前、川の水は、橋の上を越えて流れている状態だった。ワルザザートは荒涼とした土漠地帯にあり、年間降水量も非常に少ない地域である。平時は川底を僅かな水が這うように流れる程度で、濁流が轟々と流れるようなことはめったになかった。

ただ、私にとっては、この濁流の光景よりも、それを興奮した状態で眺め、このことを一大事として家族に知らせに行く日本人の彼の姿の方が非常に印象的だった。その時、私は、この辺境の娯楽のない地域では、自然災害もお茶を賑わす貴重な話題の1つなのだろうと思った。同じ日本人でも、日本人などめったに来ないこの地で、十数年近く暮らしている彼にとっては、それは同じことなのだろうと思った。

日本でも一昔前は、夏になると大きな台風が日本を直撃したり、水害に見舞われたりと言う事があったが、今の都会育ちにはなかなかそういう機会が無く、直接的に自然の脅威を感じる機会は非常に少なくなった様な気がする。また、映像などで水害などのシーンを見ても、他国の戦争、内紛などの映像と等しく、他人事として実感が湧かないのではなからうか。昨今の日本では、自然を感じる、自然の中の脅威を通して神を感じる、という超自然的な嗅覚が、だんだん鈍ってきている様な気がしたし、実際、このモロッコで起きた水害を見て、彼ほどの興奮に沸きたっていない自分に気が付いた。

10月18日(その後)

話を元に戻そう。結局、14日以降、まとまった雨が降ることはなく、川の水位も2、3日で正常な水位に戻り、町は普段どおりの活気を取り戻した。今回の水害は各所に被害をもたらしたが、街中では、この機会を利用して魚釣りをする姿が結構見られた。カンボジアの人々の逞しさをみる思いであった。また、この水害の経過に一喜一憂する自分の姿から、あの時、モロッコで日本人の知り合いが私に見せた「興奮」というものが私にも理解できた気がした。

いつも見慣れたシェムリアップ川に濁流が押し寄せ、今にも川が氾濫するばかりの勢い。そして家屋が建ち並ぶ地域が実は他よりも低地であったため、水害の被害をもろに受け、あたり一面が冠水　　その中で水浸しになりながら水害の実体験をした。今の私にとっては、川の水位の1つですら、カンボジアを過敏に感じるバロメータの1つになっていることを感じた。

2000年10月20日

上智研修所にて

荒樋久雄